緑あふれる地球へ

大館中学校　一年　西村　悠花

私たちの身の回りにはたくさんの緑がある。地球上で生活する上で、大切なものだ。

そう感じたのは七月の種差でのことだった。私が所属しているクラブで種差での合宿が行われた。たくさんの仲間と一緒に自然豊かな種差でスポーツをし協力し合い、生き物や緑にふれることを目的とした合宿だと私は思った。朝、合宿場所である少年自然の家に行くとき、奥の方へ広がる木々が日の光を浴びてより鮮やかに輝いていた。車から降りると、透き通るような風がとてもおいしく感じられた。この風はきっと、ここ一帯に広がる緑の木々が関係しているのだろうと思った。

もっとあらゆる自然を感じ、関わることができたのは夜の「ナイトハイク」だ。自然の家の周り約三キロメートルもの距離をチームで歩くというものだった。正直私は楽しさと少しの怖さがあった。なぜなら、周りはとても暗く、明りは懐中電灯とろうそくだけだったからだ。それに、木々は朝に見たときよりも黒く感じたからだ。そして、順番が回ってきて歩いた。虫の鳴く声が夏と自然を感じさせ、木々の中ではどのように感じ、木々はどのような働きをしているのか気になる気持ちへと変わっていった。少し歩いて車の通る道を通過し、木々が集まる林へと入ることができた。入ってみると、涼しいはずなのに暑かった。そこで私は、上や横などたくさんの木々を見てみた。上に大きく長く伸び、ずっしりと立っていた木々が長い年月を経て、ここまできたと感じた。また少し歩くと、大きな太い根につまずいてしまった。周りを見渡していた友達が「大丈夫。土から飛び出すぐら

い大きい根だね。木が大きすぎて空が全然見えないよ。」と言った。風や雨の中でもしっかりと伸びた根を張り「絶対に倒れない」という強い気持ちがあるのかと驚いた。土と協力して、強く成長していっていると思った。長く歩くと、次第に疲れてきた。ふいに、湿った土に全員が足をとられてしまい転んだ。やはり、自然には危険や思わぬことがたくさんある。このようなときこそ、自然や木々、草花のことを知っておこうと思ったのだ。思い返すと、道には「たぬき」や「しか」などの注意を知らせる看板があったり、林の中には大きなくもがいたりしていた。きっと木々というものは、動物や虫の住みかになっているのだと思う。もしも、このような場所がなくなったら、動物などの住みかや食べ物がなくなり絶滅してしまうのではないかと考えた。いろいろと考えていても、ずっと続く林。また友達が「こんなに長いとは思わなかったよ。奥も木、そのまた奥も木。ここってどれくらい広いんだろうね。」「こんなところ来たことなかったよ。もっと先はどうなっているのかな。」とみんな興味津々な様子で、私も楽しくなった。自然とは、わくわくとした気持ちにさせてくれる。そして、とてもさわやかな場所だ。やっとの思いで着いた瞬間は、みんなでゴールできたことと、歩き慣れない林の中を長い距離歩いたことの達成感でいっぱいだった。

このナイトハイクで、たくさんの考えが生まれた。何気ないことでも、そこには意味があり深く考えさせられる。私たちの生活に大きく関わっているのだ。だから、人間にとって緑とは絶対に必要なものである。「森林破壊」という言葉を知っているだろうか。それは、たくさんの森林という緑が伐採されて減少しているということだ。このままでは、砂漠化が進行して地球温暖化につながってしまう。世界でも緑を守るための取り組みをしているそうだ。だから、まず少しのことから緑を守っていきたい。種差には大きな木々、美しい海や生き物たちがたくさん存在する。このナイトハイクで自然の知識を身につけたい。また、協力することの大切さを教えてもらった。他の木が土と協力し合い強く生きているように、一人の力だけではできない。それに関わってくれた人たちに感謝し、協力を忘れないようにする。では、どのように緑を守り、協力していけばよいのだろうか。私は家族と毎年、庭に小さな畑を作っている。小さいけれど、一つ一つ取り組んでいけば緑はきっと増え

ていくと思う。だから、私は緑を知って守り、種差も日本も世界も豊かな緑であふれることを願っている。